

日本におけるガムランの活動に関する一考察—その変遷と現状分析をもとに—

東京音楽大学 増田 久未

本研究は、日本のガムランをめぐる活動に関する歴史的背景を踏まえ、各ガムラン団体の活動状況の調査、分析結果から諸問題及び課題を導き出すことを目的としている。日本では故小泉文夫により *bi-musicality* の実践の一環としてインドネシアの伝統音楽の一つであるガムラン(主にジャワ島、バリ島、スンダ地方のものを指す)が 1973 年に東京藝術大学に導入され、その後大学等の教育機関を中心にガムラン実践が開始された。今日 1 セット数百万のガムランの楽器が全国に多く存在し、約半世紀の間に実践現場は全国的に広がり、教育機関のみならず一般の人々の目に触れる機会も増え、日本人によるガムランを使用した教育活動や演奏活動の意義は社会的にも認められてきた。しかし、ガムラン団体の活動には栄枯盛衰が見られる例もあり、また演奏にある一定人数を要するガムランの楽器の特徴から演奏者やその指導者の不足等により、楽器そのものが使用されなくなってしまうという現状がある。換言すれば、ある一定の広がりや社会的意義を認められながらも、ガムランが世代を超えて今後も受け継がれていくまでには日本に「定着」していないとも言える。このような現状を前に、ガムランの楽器の活用方法やガムラン団体のあり方についても見直しが必要な時期に差し掛かっていると考える。

上記のような問題を解決するために、まずこれまでの日本におけるガムランの受容及び活動現場を俯瞰し、我々日本人がガムランとどのように関わり、受け入れ、消化してきたのか、その歴史と現状の詳細を分析し、原因を把握する必要がある。研究概要として、①日本人がガムランと出会い、導入し実践を始めた経緯の整理、②全国に広がるガムランの楽器の統計、分類及び分析、③活動現場に関する諸問題の抽出、となっている。なお、①②より(1)教育・普及(2)展開・応用・(3)技術継承・情報蓄積の3つの観点を導き出し、③についてこれらの観点から分析し、各問題点を抽出する。

日本のガムランの普及過程と活動について、1. 前述の(1)教育・普及(2)展開・応用(3)技術継承・情報蓄積の観点から調査、分析した結果、次のような諸問題が導き出された。(1)ガムランを活用した教育実践現場において、現地インドネシアでの指導方法を踏襲する傾向があるなど、指導方法に問題が見られる、(2)ガムランの演奏技術が高まる一方、真正性の追求が重視され、展開が一部の人のみに偏る傾向となる、(3)現在まで蓄積されてきたガムランの曲や技術、インドネシアの文化などに関する情報が散在し、共有されていない。2. また、本研究の調査及び分析結果から、ガムランの楽器の状況の数値化(年代別の楽器の増加、移動、休眠)、指導者・人材不足等の諸問題の顕在化により、1970 年代に導入された「異文化」としてのガムランが日本に「定着」していない現状がより明確となった。

さらに、3. ガムランの活動現場がそれぞれ独立し一過性のものとなるのではなく、世代を超え長期的に継続して機能するもの、すなわち「伝承」されるものであるとし、今後日本にガムランを定着させるための解決策を検討する上では、「伝承」の観点から日本のガムラン活動を捉え直す必要があると考える。上記 1 および 2 をもとに、今後の伝承基盤確立に向けた視点およびその関係について、まとめとして考察する予定である。